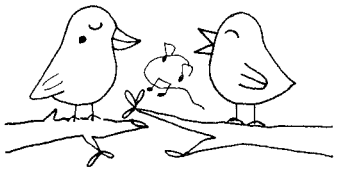
公民館の図書室は　学びの入口・みんなの本棚

図書室月報

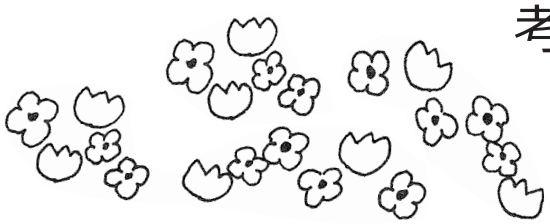
2022年（令和4年）5月5日
第708号

国立市中1－15－1
TEL.042-572-5141
FAX.042-573-0480
国立市公民館

〈図書室のつどい 参加者の感想〉



五十嵐大（だい）著『ろうの両親から生まれたぼくが聴こえる世界と聴こえない世界を行き来して考えた30のこと』を受講して



小林 圭子

手話通訳の仕事をしています。聴こえない親を持つ聴こえる子ども、コーダとして過ごされてきた五十嵐さんのお話を、強い関心を持ってお聞きしました。一つ一つの言葉を大切に伝えられておられ、それは今まで守り続けてきた五十嵐さんのご姿勢のようにも感じました。

私は以前から、マイノリティとマジョリティについて考えていました。現在「多様性を認める社会」が謳われています。「多様性を認める」とは、「差別する、差別しない」とは具体的にどういうことなのか、どんな心の在り方なのだろうかと漠然と考えていました。

耳の聴こえないお母さまをめぐるお話を聞きながら、お母さまに対する様々な温度の視線をふと感じました。そしてそれを近くで、あるいは遠くで見ていた五十嵐さんのまなざしも感じました。「お母さんが大好きだけど嫌い」という言葉が深く重く、心に残っています。一方、社会全体を見れば聴こえない人に関わる機会、知る機会が非常に少ないことも改めて考えました。

以前、聴覚障害を持つ大学の先生が「マジョリティが特権を持っている」とブログで語っておられるのを見た時、その「特権」という文字が頭の中を巡りました。マイノリティとマジョリティの間に置かれた言葉として、初めてそれを見たからだと思います。五十嵐さんも、マジョリティつまり「聞こえる世界」に社会の「普通」が引き寄せられていることを強く語っていらっしゃいました。

私たち通訳者は、「マイノリティとマジョリティ」という言葉のみを聞けば、手話でその二つを横並びに表現するのですが、ある当事者と話をした時にはその感覚が少し違うように感じました。

「差別」という手話をよく見てみると、掌を下に向けた両手を上下に引き離すものと、片手のみを引き下げるものがあります。もしかすると前者はマジョリティの「特権」を意識していたのでしょうか。改めて、この表現の意味、表現する自身の意識を問いかけてみようと思いました。

「親切」や「思いやり」というのとは別に、両手を同じ位置へと戻す。これが本当は必要なことでありながら、社会は具体的にどうしていったら良いのか、様々なことを考えさせられる講演でした。

当日は手話通訳が付き、オンラインにより聴こえない方々も共に受講することができました。情報保障は大切な権利の保障です。今回、通訳を含めたオンライン映像の見やすさを求めてリアルタイムで様々な声が届いていましたが、そのつど開催者側は真摯に対応され、格差のない情報提供に努めておられました。素晴らしい講演の開催に感謝します。

（幻冬舎）

〈図書室のつどい 参加者の感想〉

「日本の裁判所、裁判官、裁判とその制度的・構造的な問題」を受講して

瀬木比呂志著『檻の中の裁判官－なぜ正義を全うできないのか』

松本 一男

先日、大阪高裁において旧優生保護法に基づく強制不妊手術に関わる訴訟の判決報道がありました。除斥期間の適用は「正義に反する」とし、「時の壁」を崩し、原告救済に道をつけた判決でした。それまでの各地裁の判決は、すべて原告側の賠償請求を棄却するものだっただけに、注目すべき判決でありました。

このような一連の判決の流れを振り返ると日本の裁判所は本当に正しく機能しているのであろうか、裁判制度のあり方についても考えさせられました。公正な裁判があってこそ我々の日々の生活や営み、就中弱（なかんづく）い立場の人々の権利や暮らしを守ることができるかがかかっているからです。日本の裁判所、司法制度がしっかりと機能し、正義が担保されなくてはなりません。

講師の瀬木比呂志先生は、元裁判官で長く司法に携わってこられた方です。我々の知ることができない、裁判所内部の現状と問題点を指摘されていた内容は、かなり衝撃的でありました。講師の著書『絶望の裁判所』において「日本の裁判官が、実際にはその本質において裁判官というより、官僚役人でありながら信頼されてきた大きな理由は、平均的な裁判官がたとえ保守的であり考え方や視野は狭くても、日々誠実に仕事をし、たとえば行政訴訟や憲法訴訟といった類型の事件を除いた日常的な事件に関する限りは、当事者の言い分にもそれなりに耳を傾けてきたからである。つまり職人タイプの裁判官が日本の裁判の質を支えていたわけである。しかし、上層部の劣化、腐敗に伴い、そのような中間層も、疲弊し、やる気を失い、あからさまな事大主義、事なかれ主義に陥っていったのである」と。

私は、40年以上金融機関に勤務し、その間日本全国の公証役場で元裁判官であった公証人の先生方と多々接する機会がありました。ある公証人の先生は、愛知県内の公証役場に勤務されていて、「もう3年も単身赴任で疲れましたよ。毎週金曜日の夜、洗濯物を持って東京の自宅と往復しているんです」とか、また別の公証人の先生は「最終のポストでどこの公証役場に配属されるか大体きまっているんです。だからなるべく良いポストで最後を終えたいんです」とおっしゃっておられました。

皆さん大変そうでしたが、多くの方は日々コツコツ誠実に職務をこなされておられました。中には、少数ではありますが、事務員任せで、書類文書の点検等ミスが多く不十分にもかかわらず高圧的な物言いの方もいましたが。

裁判所は、行政、立法と並ぶ三権分立の根幹であるにもかかわらず、裁判所、裁判制度に関する報道や著書も少なく、私たちはその実情を知る機会はほとんどありませんでした。

本講演会を機に日本の裁判の実情と問題点について考える機会となったことは、大変有意義でありました。前記『絶望の裁判所』の他、『ニッポンの裁判（城山三郎賞受賞）』も大変参考になりました。　（ＫＡＤＯＫＡＷＡ）

昨年度の図書室利用状況

- 昨年度の開室日数は、305 日
- 貸出冊数は、23,385 冊
- リクエストの件数は、
  窓口での受付分が　1,336 件
  Web での受付分が　6,882 件
- 図書室の蔵書数は、26,716 冊（閉架を含む）

新着図書から

〈哲学〉
江戸の学びと思想家たち　辻本雅史（岩波書店）121
生きのびるための「失敗」入門　雨宮処凛（河出書房新社）159

〈歴史〉
戦時下の日常と子どもたち　佐々木賢（青土社）210
従軍日記と報道挿絵が伝える庶民たちの日露戦争　西川武臣（勉誠社）210
ニュージーランド　アーダーン首相　マデリン・チャップマン（集英社）289
アウシュヴィッツ生還者からあなたへ　リリアナ・セグレ・述（岩波書店）289
旅をひとさじ　松本智秋（みずき書林）290
東海道五十三次いまむかし歩き旅　高橋真名子（河出書房新社）291
ベートーヴェン、２１世紀のウィーンを歩く。　曽我大介（集英社）293
ヘルシンキ生活の練習　朴沙羅（筑摩書房）293

〈社会科学〉
田舎はいやらしい　花房尚作（光文社）318
ルポ死刑　佐藤大介（幻冬舎）326
１４歳からの資本主義　丸山俊一（大和書房）332
なぜ私たちは友だちをつくるのか　ロビン・ダンバー（青土社）361
もう空気なんて読まない　石川優実（河出書房新社）367い
チョさんの「身売り」　いのうえせつこ（花伝社）367い
地域女性史への道　折井美耶子（ドメス出版）367お
私は男でフェミニストです　チェ・スンボム（世界思想社）367チ
あいつゲイだって　松岡宗嗣（柏書房）367ま
はじめての西洋ジェンダー史　弓削尚子（山川出版社）367ゆ
ヤクザ・チルドレン　石井光太（大洋図書）368
水底を掬う　河上正二（信山社）369
#教師のバトンとはなんだったのか　内田良（岩波書店）374

〈自然科学〉
発達障害という才能　岩波明（ＳＢクリエイティブ）493
いのっちの手紙　坂口恭平（中央公論新社）493
自閉スペクトラム症の女の子が出会う世界　サラ・ヘンドリックス（河出書房新社）493
保健所の「コロナ戦記」ＴＯＫＹＯ２０２０―２０２１　関なおみ（光文社）498

〈工業〉
魚はなぜ減った？見えない真犯人を追う　山室真澄（つり人社）519
日本の近代建築ベスト５０　小川格（新潮社）523
核災１０年、福島からの声　澤正宏（クロスカルチャー出版）543

〈芸術〉
目の見えない白鳥さんとアートを見にいく　川内有緒（集英社）707
妄想美術館　原田マハ（ＳＢクリエイティブ）720
新海誠の世界　榎本正樹（ＫＡＤＯＫＡＷＡ）778
言葉の花束　サヘル・ローズ（講談社）779

〈言語〉
日本語はこわくない　飯間浩明（ＰＨＰ研究所）810

〈文学〉
同志少女よ、敵を撃て　逢坂冬馬（早川書房）91あ
正欲　朝井リョウ（新潮社）91あ
遠慮深いうたた寝　小川洋子（河出書房新社）91お
もう別れてもいいですか　垣谷美雨（中央公論新社）91か
とどのつまり人は食う　佐野洋子（河出書房新社）91さ
少女たちの戦争　中央公論新社編（中央公論新社）91ち
特許やぶりの女王　南原詠（宝島社）91な
ミカエルの鼓動　柚月裕子（文藝春秋）91ゆ
ミトンとふびん　吉本ばなな（新潮社）91よ
黒牢城　米澤穂信（ＫＡＤＯＫＡＷＡ）91よ
本当の豊かさ　ジャン・ジオノ（彩流社）95ジ
同意　ヴァネッサ・スプリンゴラ（中央公論新社）95ス
緑の天幕　リュドミラ・ウリツカヤ（新潮社）98ウ

〈一節〉

マーシャ・ライス著 柴田譲治訳『リンゴの文化誌』

リンゴが現代も迷信と切り離せないのはある意味では当然だ。世界中のほとんどの文化の神話や宗教、芸術のなかにリンゴが深く植え付けられてきたのだから。リンゴを善や悪と結びつける事例はあらゆる時代の物語や絵画のなかにあふれている。リンゴは、美と欲望そして罪を象徴するものであり、すぐれた健康食であり、毒が隠された存在でもある。文芸作品に最もよく登場する果物であり、繰り返し象徴的な表現として取り上げられ、静物画のモチーフとしても最もよく選ばれてきた。そしてリンゴそのものが象徴となり、スーパーの棚に並ぶだけでなく、コンピューターやスマートフォン、音楽プラットフォームのブランドとして知られるようになった。著者はジャーナリストのフランク・ブラウニングと共著で『アップル Apple』（１９９８年）という本を出版したことがある。ブラウニングは、家族経営のケンタッキーの果樹園で父親とリンゴの世話をしながら成長した人物だ。その書籍でわたしたちはリンゴのもつ複雑なアピール力についてこう書いた。「普通なのに不思議で、トーストのように当たり前な存在でありながら、夢のようにつかまえどころがない」。（原書房）

図書室のつどい

『和菓子の歴史と魅力』

講師　青木 直己（東洋大学、立正大学非常勤講師）

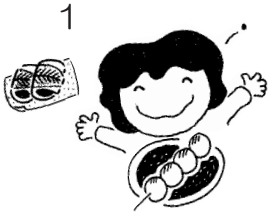
繊細な味わいと美しい見た目で、日本人に愛されてきた和菓子。その歴史は古く、古代から現代まで、文明の発達や外国文化の影響を受けながら発展を遂げてきました。嗜好品としてだけでなく、神仏のお供え物や、ゲン担ぎとしての役割も果たす和菓子は、日本人の人生の節目には無くてはならない存在と言えます。

今回は、和菓子の歴史と文化に関する調査・研究に長く携わってきた青木直己さんをお呼びし、和菓子の歴史をたどりながら、それぞれの由来や役割を解説していただきます。

〈青木さんの本〉

『美しい和菓子の図鑑』（二見書房）、『図説和菓子の歴史』（ちくま学芸文庫）、『幕末単身赴任下級武士の食日記　増補版』（ちくま文庫）、『江戸うまいもの歳時記』（文春文庫）ほか

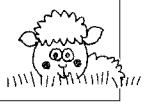
と　き　6月12日（日）昼2時～4時
ところ　公民館　地下ホール
定　員　40名（申込先着順）
申込先　5月18日（水）朝9時～
公民館　☎（572）5141



〈私の本棚から　第2回〉

吉田誠治 著『ものがたりの家 ―吉田誠治　美術設定集』

上原 真弓



子どもの頃、新聞に挟まったチラシの中から不動産屋の広告を見つけ出して見るのが好きでした。２ＬＤＫのマンションだとか、庭付きの戸建てなどの間取り図を見ては「私の部屋はここで、妹の部屋はここ！」「ダイニングテーブルはこの向きで置いて、ソファーはこのあたりにしようかな」なんて考えたら止まらなくなり、時間を忘れて妄想を膨らませていました。

学生時代に一人暮らしを始めてからは、家族住まいのお部屋だけでなく一人暮らしの趣味にどっぷり浸かったお部屋の写真集を眺めるのが楽しかったです。また日本だけでなく、パリのアパルトマンの部屋だとかモンゴルの移動式住居、ニューヨークでのシェアハウスなど世界の部屋の写真を見ては、自分とは全く異なる人の生活を想像していました。

お部屋の中をみていると、住んでいる人の生活が見えてきます。本を読むのが好きだとか、調理器具が多いし見た目と違って（笑）自炊するタイプなのかな、とか。

この本は、それらの想像のベースとなったお部屋の間取り図や写真たちが、現実世界から物語の世界に広がったものです。物語の世界といっても、初めて見る世界ではない気がします。今まで読んできた小説や漫画、映画の世界の、主人公とはちょっと違う土地での出来事。なぜかとても懐かしさを感じつつ、同時に新しくも感じます。自分の思っていた物語の世界が、実はもっともっと奥行きがあるもので、生活が営まれている様子がリアル感を持って目の前に差し出されたイメージです。著者の手書きのコメントも奥行き感に一役買っています。

私が特に好きな家は、「巨岩と暮らす家」！「巨石信仰の一種として、巨大な岩に寄り添うように建てられた家」なのですが、シンプルで余計なものがなく、それでいて心の充実感を感じられる家は本当に素敵で、ぜひとも訪れたい（笑）。一人で住んでいる老婆の佇まいにも魅せられます。

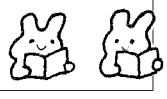
ただの面白い家のイラスト集でなく、その家をベースとして頭のなかで新たな物語が始まっていく、そんな一冊です。

（パイ　インターナショナル）

くにたちブッククラブ

―感傷から遠く離れて―

井上荒野『あちらにいる鬼』（朝日文庫）

講　師　山岸 郁子（日本大学・日本近代文学）
と　き　5月12日（木）夜7時半～9時半
ところ　公民館 地下ホール
申込先　公民館　☎（572）5141

＊次回は6月9日（木）
金原ひとみ『持たざる者』（集英社文庫）です。